

渋谷の街で

関山みどり

渋谷区恵比寿保健相談所(東京都)

脇坂公子さん、「りれー随筆」のバトンをありがとうございました。大阪市立助産婦学校時代のクラスメートが次々と登場し、16年ぶりの再会のごとく喜々として読みました。

脇坂さんは、企業戦士ともいべきご主人を支え、数年ごとの転勤を陽気にこなしています。りっぱな専業主婦の脇坂さんがずっと、この「助産婦雑誌」を愛読し続けているというのですから、助産婦という仕事の魅力を今さらながら感じています。

そして地域へ

私も現在は臨床を離れ、東京・渋谷区の保健婦として働いています。私は助産婦学校を卒業後、新しいことは何でも吸収したいという思いで上京し、品川区にある関東通信病院へ就職しました。

助産婦だけでも30人近い人数が揃っており、当時オープンしたばかりの分娩棟のスタッフは助産婦のみという、恵まれた病院でした。

その分娩棟に勤務していた頃、重症の脊髄破裂の子を出産したお母さんの介助をしました。非常に印象に残っていたケースですが、半年以上も過ぎたある日、そのお母さんから院内で呼びとめられたときには、すぐに思い出せませんでした。

母親に抱かれたその子が、3回目の水頭症の手術のため小児科へ入院中と聞いて、私は青ざめてしまいました。分娩の場だけではみえないことがたくさんあるのです。

退院した後、地域でどのようにフォローされていくのか知りたい、地域で働いてみたい、そんな思いにかられました。

そして、3年間の臨床の後、都立公衆衛生看護

専門学校の保健学科へ進学しました。

卒業して地域へ出てみると、幅広く、奥深く、わからないことばかりでした。

分裂症のデイ・ケアも、アルコール依存症の相談も、痴呆性老人への対応も、褥瘡の手当も。どうにも動けないスタートでした。

しかし、地域看護は息の長い仕事で、異動のない限り同じケースと何年も何年も関わっていくことができ、1ケース1ケースに教えてもらいつつ、救われたことも多くありました。

公衆衛生の深みは、個別ケースの関わりとともに個々の問題をマスとしてとらえ、その地域における健康問題に取り組んでいけるところです。

ところがここ最近、その地域、渋谷が、想像もつかなかったほど、大きく変わってきています。

今、都心で

私の勤務する渋谷区は、あの1985年頃の急激な地価高騰、さらに都庁の新宿移転の波を受け、ここ数年で著しい人口減少に見舞われています。

特に乳幼児の減少は大きく、0～5歳児は1986年以降の5年間で、平均25%も減っています。渋谷駅周辺では、年間1人も赤ちゃんが生まれなかった町が2つもあり、子供のいない街がつくられつつあります。

保健所の乳幼児健診でも、「近所に友達がいない」「せっかく公園に行っただけ、だれも来ない」といった悩みが多く、子供の集団を求めて早期から奔走するといった親たちが増えてきています。

1歳半健診、3歳児健診の際に聞きとりをしてみると、幼児教室、体操教室、スイミングスクー



ル等に何らかの形で通っている子が多く、母1人で子育てをしていく不安が浮き彫りにされます。

このような、若い親達のニーズを見事につかんだ子供産業としての幼児教室が区内に30か所以上もつくられてきています。

その教室の低年齢化の進む中で、対象年齢が1～2歳の、知育、進学を目的とした教室まで出てきて、まさに、オムツをはめて塾通いという異常な現象も笑えなくなってきました。

地域の育児力を高めていくには

母子に限ってみても、地域の変化につれて、どんどん住民の生活が変えられていきます。地域は、まるで目の離せない生きもののようです。

この少子化傾向の進む中で、それではどうしたら、公的に地域の中での育児力を高めていけるのかが、私たちの大きな課題です。

生活の場の身近にある保健相談所だからこそ、子連れ、エプロン掛けで来られる子育ての拠点になりうると思い、新しい事業を模索しています。

恵比寿管内は愛育病院、都立広尾病院、日赤医療センターと、大病院を3つもかかえたエリアですが、妊娠中からぜひ地元で知り合ってもらおうと、母親学級の個別通知を始めました。また、産後1か月以内の地区助産婦の訪問後には、母乳教室を企画し、乳児健診前の母乳トラブルへの対応と、子連れで集う場の提供を試みてみました。

3～4か月児の乳児健診の後には、腹ばい時代とはいはい時代での2回の育児学級を開催しています。栄養士、歯科衛生士のスタッフと組んで、保健婦は特に、母親に子供といきいきと遊んでもら

うことに重点を置いて運営しています。この学級で知り合った母親たちが、子育ての自主グループへ発展するなど、新しい出会いも生まれました。

異常の早期発見に主力を注いできた保健所健診時代からもう一歩踏み出して、元気に生んだ少ない子を、親同士がどう力を合わせてたくましく育てていけるか、地域の繋がりや薄れた都会においてこそ、行政の役割は大きいと痛感しています。

5人目の出産を控えて

そんな中で、もうすぐ5回目の産休に入ろうとしている私です。助産というより、すっかり産む側にまわってしまいました。11歳を頭に、8歳、5歳、3歳、そしてもう1人に恵まれました。

初産の時、国立市の三森助産院で、今は亡き三森孔子先生にお世話になって以来の安産続きです。

上の4人の時は、首のすわりぬ産休明けから、ベビーシッター、保育ママさん、無認可保育所とかけずりまわりながら働いてきましたが、今回は、ようやく施行された育児休業法を使い、1年間充電することにしました。この休業に、初めての子育てのごとく心踊らせています。

* * *

さて、次のバトンは、関東通信病院で一緒に勤務した湯川すがさんに渡します。

湯川さんには、バタバタと走る愛車ワーゲンに、準夜の後よく乗せてもらいました。ひさしぶりに電話を入れると、「すごいね、産みまくってるわね」と言われてしまったのですが、この頃の病院のようすなど、近況を聞かせてもらいたいと思います。